

yell vol.9

採用と教育 研究所



ほっ。とエピソード

盆栽屋あべ 本質編

福島市在庭坂の「ぼんさいやあべ」。その盆栽の在り方、匠(たくみ)の技に触れるため、世界中から見学者が絶えません。初代倉吉(くらきち)さんから二代目健一さん、そして三代目大樹(だいき)さんへと代々続く歴史と盆栽への想い、大切に受け継がれた「盆栽の本質」をご紹介します。

「自然らしさ」を創る

初代倉吉さんが盆栽を作るうえで忘れてはならない言葉として挙げたのが、「空間有美(くうかんゆうび)」という言葉です。字の示す通り、「空間には美しさがある」という作り方のことです。盆栽は一般的には丸い形の物が良いとされています。しかし、ぼんさいやあべの庭棚に並べられた盆栽は、それとは異なった形をしています。初代倉吉さんから伝わるぼんさいやあべの作風にのっとった作品です。

枝と枝の空間、幹と幹との空間を創り出すことで、その間から、幹の模様や枝の格好を見せ、その木が持つ美しさ、自然らしさを生み出します。庭木の植え込みのように整えられた盆栽では、枝や幹が葉で隠れてしまいます。ひと目見た時の美しさであれば、整えた方が良く見えるようですが、整えられすぎた美しさには飽きがきてしまいます。また、ごまかしも出てしまいます。ぼんさいやあべの作品は、本来、その木が持っている個性を生かし、普遍的な自然らしさを生かしていくことで、長く楽しめる作品になっています。

「自然らしさ」は、決して感覚だけで表現できるものではありません。ぼんさいやあべでは、家族総出で、頻

繁に山に足を運び、自然に学びます。種から育てている吾妻(あづま)五葉松のある吾妻山はもちろんのこと、海外に講師として赴いた時でも、現地の人と一緒に山に繰り出します。そこでは、観光として自然の美しさをただ眺めるのではありません。徹底した観察が伴います。松の枝振りはどうなっているのか、葉の先端の様子はどうか。松だけでなく、様々な種類の樹木の一本一本の特徴を細かく観察します。特に自分が感動した木に対しては、その木のどこに自分が感動したのか、なぜ、この枝振りが良いと感じるのかを突き詰めて考えていきます。自然が持つ感動を、盆の上に表現し、普段山に足を運べない人たちにも伝えていきたい。自然と人への想いと、それを伝えるための感覚。常に自然に対しても「なぜ？」と問いかける姿勢がその感覚を磨き、盆の上に「自然らしさ」を生み出していきます。



吾妻山の根上りの松(←)
風雪などの自然環境の影響で
根本の上が削られ、五葉松の
根が地表に露出している。
あべの盆栽ではこのような自然を盆の上に表現している。



半田 真仁 (はんだ しんじ)

「採用と教育研究所」所長

企業、自治体等の採用と教育を手がける。福島県を中心とし、地元の中小企業から上場企業まで「仁財育成」のサポーターとして定評がある。

笑いが溢れ楽しく役立つ講演は学生から経営者まで幅広く人気で全国を駆け回る。

例えば、風の強い場所に自生している松は、風下の枝しか残っていません。これは、厳しい風に吹かれることで風上の枝が枯れてしまったためです。ぼんさいやあべでは、このような厳しい自然を盆の上に表現するため、わざと風上の枝を取り、風下の枝も風に流されるような形に仕上げていきます。松が幼いうちから、最も自然らしい姿はどんな形かを想像し、「しつけ」をしていきます。それは、自然環境、風の強さや向き、山の標高、気温、雪の深さなども考え抜いた結果の「しつけ」なのです。

倉吉さんらが「自然の木々を見習って盆栽として作っている」というと、「山の木なんてただまっすぐの面白みの無い木ばかり」だと言う人もいます。しかし、それは山を山として、全体としてしか捉えきれていないからなのです。自然の中で風雪にさらされ、何十年、何百年もかけて姿を変え、今に至る樹木は、人間と同じで、一本として同じ姿をしているものはありません。そしてその中でも、特に感動を与える木があるとき、その木をただ模倣するのではなく、理想的な一部を観察し考え、切り取って仕上げるのが盆栽です。自然を作ると言いながらも、理想を人の手で作る。矛盾した行動に見えますが、山の中という空間にある松と、庭や室内に置かれる盆栽ではそれぞれに、より自然を伝えやすい姿があります。

盆栽に表現するのは理想の自然の姿。それにも関わらず、世の中には自分たちの理想を上回る自然も存在しているのだといいます。初代倉吉さんが、「この木は、自分に聞いて出来た様な姿だな」と言った、吾妻山中に残る「日暮しの松」などその最たるものです。倉吉さんは、自分の思い描く理想の盆栽の姿をした日暮しの松を眺め、「自分はこの木よりずっと遅く生まれたのだから、やはりこの木は、自然と松自体の力によって出来たのだな」と、改めて自然の偉大さに心を打たれたといいます。追い求める理想、それを上回る現実。何百年、何千年と続く自然を表現する盆栽の世界に終わりはありません。



ぼんさいやあべの作品(←)
枝の無い側から、枝がある側に強い風が吹いている場所の松を盆栽に表現。風上の枝は厳しい自然によってほとんど枯れてしまっており、風下の枝もすべて、風で流された形になっている。ぼんさいやあべが観察し、お手本としている福島市の吾妻山の自然の中には、このような松の姿を見ることが出来る。



(松の姿を整える二代目健一さん・左)

二流を一流に

「自然を表現する」「個性を見せる」という言葉だけを見れば、ただ、その樹が伸びるままに放任していくようにも思えます。しかし、私たちを感動させる自然は、その姿になるまで何十年、何百年とかけて生まれてきたものです。それを盆栽で表現しようとするときには、やはり、人の手をかける必要が出てきます。

ぼんさいやあべでは、しっかりとした基本と技術にのっかって自然を表す作品として仕上げていきます。例えば、盆栽には接木(つぎき)という方法があります。

自然らしさのある良い根の形や幹があった時に、その葉をよく見ると、極端に湾曲していたり、細すぎたりしています。盆栽が理想とする葉の形というのは適度な太さがあり、直毛で、形はおちょこのように広がったものが美しいとされています。幹、枝、葉、全てが申し分なければ一流の素材といえますが、当然、二流の素材が多くあります。例えば、幹、枝が良いけれど、葉の形が悪ければ、それは二流の素材。しかし、盆栽作家はこれを一流に仕上げていきます。不要な葉を持つ枝を切り落とし、一流の葉を持つ木を接ぎ木します。接ぎ木は、人が骨折した際のギプスのような固定ですから、すぐに移植して一つになるわけではありません。5年程度の歳月をかけて二つの木はなじんでいきます。年を重ねる事に元々は別の木だった枝もなじみ、接ぎ木したことが分からなくなります。

一流の素材は誰でも一流に仕上げられます。盆栽屋の仕事は、二流の素材を一流に、三流の素材を二流に、一流の素材を超一流にすることだと三代目大樹さんは話します。良い面を見極めて生かし、悪い面には手をかけて補うことで、その木の良さを引き出していきます。会社でも同じで、長所は残しつつ、短所は失敗と成長という接ぎ木をし、時間をかけてじっくりと改善していくことで、その人の持っている力をより深いところから引き出すことに繋がるのではないのでしょうか。

技術を生み出す日常

「技術と感性は違う」。

三代目大樹さんが、東京で修行した時、親方の教えの中で、一番心に残っている言葉です。

ぼんさいやあべは、盆の中に、普遍的な自然らしさを追求していきます。大樹さんが修行に行った盆栽屋は一般的な売れ筋を読み、そういった作品を作ること、お客様に喜んで頂こうというところでした。つまり、ぼんさいやあべの感性とは異なる盆栽を作っていたのです。親方は、ぼんさいやあべの作風も認めた上で、阿部家を継ぐ大樹さんに「どんな優れた感性、自然を表現しようとする志があっても、それを表現できる技術がなければならぬ」と教えてくれたそうです。

自分たちの理想とする盆栽の形は違っても、それを作る上で必要となるはさみの使い方や、「しつけ」の仕方などの技術は同じ。盆栽を形とする技術がなければ盆栽職人とは呼べません。企業によって目標ややり方は違いますが、基礎となるビジネスマナー、コミュニケーション力がなければ社会人と呼べないことと同じです。

では、その「技術」はどうやって身につけるのか。彼らの仕事の中に何か特別な修行が含まれているのでしょうか。

ぼんさいやあべが日常的に行う仕事は、草むしりや水やり、消毒など。実はこの、基本的な毎日の仕事の中で、磨かれていく技術があります。例えば草むしり。一夏をかけて、種から育った松の畑の草むしりを行います。3つの畑を、1ヶ月かけ、ひたすらに草むしり。真夏の日



(種から五葉松を育てている松畑。一夏をかけて草むしりを行う)



(棚場に並ぶ盆栽。世界中から見学者が訪れる)

差しの中、中腰の体勢を維持しながら行う草むしりは重労働です。ただ、この仕事が大切な役割を果たしています。草を取りながら、松の生育状況を見る。その木の個性を見極めて、将来どんな盆栽にしていくのか想像する。毎日の水やりも、水をやりながらその盆栽の調子や、今後の姿を想像し、盆栽を見る目を養っていくのです。盆栽づくりは、草むしり、水やりの中から始まっています。掃除、あいさつ、コピー取りなど、日常の仕事をただ単に「雑用」と考えるか、それとも学ばせていただいていると考えるか。考え方が違うだけでその仕事の意味が変わってきます。さらに人を感動させる仕事の根底が出来上がってきます。盆栽に限らず、仕事のコツがここにもありました。

健一さんらは、自分たちが掲げる作風「空間有美」は手段に過ぎないと言います。大切なのは、空間有美を持った盆栽を使い、自然の良さを楽しむ感性を持つ人たちと共鳴し合い、そして感動していただくこと。空間有美の盆栽が表現しているのは、何十年、何百年かけて出来た自然の姿。それは、誰もが感動できるものです。しかし、多くの人はそれに気づかずに暮らしています。その感動を盆栽という形で、伝えてくれる作品達だからこそ、阿部家の盆栽は世界中で愛されているのでしょう。それもすべて、盆栽作家三代が、感動に気づく生き方をしているからこそ。空間有美を作品として残していく生き様があります。

三号にわたってとりあげてきたおもてなしの心、故郷への想い、人育てにも通じる盆栽育ての道、鋭く深い観察と感性、そして基本の積み重ねの上にある技術。そうした生き方、生き様の中にこそ、”売らない盆栽屋”が目指す「自然らしい」感動がありました。

原発から10 km の福島県浪江町。未だ避難生活は続いています。先日、福島市にある浪江町仮設住宅で、笑いヨガを実施しました。笑いヨガとは、ヨガの呼吸法を取り入れた笑いの健康体操。健康増進はもちろん、コミュニケーションを深める楽しいひと時です。

仮設住宅は、震災前に生活していた自治体ごとに、居住区が分かれています。集会場もありますが、住民全員が集まる機会は実は少なく、また集まる機会があったとしても、全員で笑う機会はほとんどありません。特に仮設住宅は、1世帯の面積が狭く壁が薄いため、「うるさい音を立ててはいけない」と、隣接するご近所への気遣いから、大きな声で笑ったり、話をするなど、のびのびと生活することが少なくなっている所もあるようです。

浪江町社会福祉協議会様よりお声かけいただき、笑いヨガをさせて頂くことになりました。はじめは耳馴染みのない「笑いヨガ」という言葉に、参加した住民の方々は硬い表情でしたが、「笑いは科学的にみても、健康に良いんです。今日は笑いの研修で



すから、安心して大笑いしてください」とあいさつし、笑いヨガがスタートしました。最初は作り笑いからですが、皆で笑いあうことで、次第に表情がほぐれてきました。終わる頃にはすっかりお腹のそこから笑い合い、本物の笑いがあふれました。「震災後、こんなに笑いあったのは初めて」。笑いの後は、自然と会話も弾みました。

コミュニケーションに大切な「笑い」。最近笑うことが少なくなっているという皆さん。のびのびと笑い研修を試してみたいかがでしょうか？ ワッハハハ。(笑)



編集後記

福島市にある桜の聖母短期大学の一年生が弊社にインターンに来てくれました。「働くことが初めて」という彼女のインターン期間は5日間。最終日までには「早く社会で働いてみたい」と思ってもらえるように、毎朝の掃除から、朝礼への参加、文章の打ち込みや研修の準備に参加をしてもらいました。

そうして迎えた最終日。この5日間で学んだことの発表の時間が来ました。業務を通して、笑顔や挨拶といった基本的なことが大切なこと、物の見方を広く持つことの大切さなどを気づいたと発表。最後は「5日間で採用と教育が一番大切にしていると思ったことを発表します」と言ったあと、弊社の企業理念を暗唱して発表してくれるといったサプライズもあり、感動の5日間となりました。

「これまで働くということが怖かった。でも、インターンを通して、こんな職場なら働きたいと思えるようになりました。また、もしも職場の環境が良くなかったとしても、挨拶と掃除、笑顔で自分から職場を良くして行って働いていきたい」。彼女が弊社で学んだことは、弊社に関わってくださる企業の皆様から学ばせていただいたことです。生き生きと働かされている企業様に囲まれているからこそ、私たちもまた笑顔で仕事をさせていただいています。最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

発行 / 採用と教育研究所

TEL 024-529-5153 / FAX 024-529-5794

E-Mail : info@saiyoutokyouiku.com

HP : http://www.saiyoutokyouiku.com

[Special Thanks] Hiroko Aihara / Photo: Takao Horiuchi, Daiki Abe